



薔薇を咲かせる

小河 富美子*千葉

頂きしビール一杯飲んだだけ脳がふやけて半分眠い
背肩より寒さがじわり刺してくる甘酒のんで今日早じまい
水溶きの十リットルの薬剤が背負えるうちは薔薇を咲かせる
杉花粉赤土埃のかすむ畑子らの分まで植えるジャガイモ
日本にも原発はあり外つ国に続く理不尽思えば不安

むすび一個で

小島 りき子*神奈川

こぶしの花ぼんぼりのごとく散りばめて碓井峠に遅き春くる
受験生送り出してからつぽの頭で歩く菜の花畑
天然の岩壁要塞の鎌倉尾根むすび一個で四時間歩く
県民割・旅広告の増えてきて新患八千人の記事は小さし
シベリアの強制労働の再現か人道回廊^{シベリア}ロシアにゆく人

見返り柳

末光 奈緒子*神奈川

公園の電話ボックス透明なからだにさくら受けながら黙
大門の見返り柳の残る道スモホ向ければ一葉揺らぐ
おぼん吉原の遊女の知恵の起請文 血判付きの夫婦の誓い
南天の葉ばかり繁る時期を耐え「難」を「転」じる赤い実を待つ
伸びすぎたほうれん草を売るお店(たつぷりほうれん草)と謳って

QRチケット

荒川 ゆみ子 東京

上野駅公園口をボンと出て台地の上にそのまま立てり
QRチケットしめし二千年前の遺物をこの目で見るなり

松尾 祥子選

「あすなる集」特選

うす青き影

斎藤 嶺也 北海道

あづさゆみ春の光にとけ初むるなだりの雪のうす青き影
武力もて侵攻止まぬ白熊の視界をふさぐブリザード来よ
侵攻のロシアの兵よ君たちは自分の意志もつ人間であれ
わが畑に春の光はそそぎ来もウクライナの畑戦火の炎
殺しあひ砲火とどろく穀倉の大地に間なくカッコウは啼く

安否確認

多田 美慧子*宮城

うぐいすが幼く鳴けるその深夜地震速報再びの揺れ
深夜にも安否確認に廻り来る白き布出す決め事忘れ
「待ちに待つ新幹線が開通し」繋がる」という言葉噛みしむ
バス停の見知らぬ人が話し出す震災のことウクライナのこと
はくれんの散りし花びら手に重ねなんと重たきことしの春よ

赤さびてごろりと奴隷の枷のこり黙りこくつて人々は視る
娼館の壁画の展示はなかりけり東京国立博物館に

博物館をひとり訪ねてはかへりみち誰かと語り合ひたくなりぬ

鈴木 竹志選

大 筍 塚 本 裕紀子 東京

訪ねたる日のあり鶴川高蔵寺焼けおちしとふ堂も庭木も
芽吹きたる山にほつほつ桜咲き吉野の山に想ひはめぐる

日の差せる野辺にて柔きよもぎ摘む多摩の丘陵バスを待つ間に
筍を見れば心は浮き立ちて身の程知らずに大筍を買ふ
大筍さげて家への道すがら重力はみな腰に集まる

い い ね 富 永 恵美子* 東京

キティちゃんの切手八枚貼られたるわたくし宛ての手紙は苦情
上司から「姿勢がいいね」と褒められて他にも何かいいねが欲しい
とりの名をうらはは挙げゆく はと、すずめ、からす、にわとり、ひよこ、やまどり
戦争を忘れて過ごした日の夜に書き間違える(列)を(死)と二度
電車、バス、タクシーみんなだめな夜 ならば歩いてやろうじゃないの

ロコ・ソラーレ 前 中 映 東京

代替の経路の有無を確かめて人身事故の仔細は問はず

地に還り空にかへりて昨夜の雪もおほかた見えなくなりぬ

これの世にロコ・ソラーレが居る限りオリンピックは冬だけでいい
「打ちますよ、一・二・三」と医師が言ひてワクチン接種終はりぬ

いつぼんのリベットとして海の辺の駅を百年支へてゐたい

中 也 和 泉 邦 子 新潟

籠もり居て整理整頓してをれば本に混じりて教科書いでく
忘れ得ぬ高校二年のはじまりに我らは学ぶ「一つのメルヘン」
教壇を下りて中也を語るとき波打際に先生は立つ

褪せし冷たく重き教科書は頁岩のごと押し花ひそむ
おづおづとびつしりと薄くさらさらと書込みありぬ古い教科書

高 野 切 加 藤 かづゑ* 新潟

電車の床に並ぶ黒靴まあたらし若き三人研修帰りか
どこで冬を越したのだろう大きくもない揚羽蝶庭を横切る

山肌にふわりと被るうすも色いくつの芽吹きがあそこにあるや
人との別れよりはこころの癒えやすく割れたカップの代わりを探す
高野切の内なるリズムもしかしてシヨパンの小さなマズルカに似る

城 跡 古 木 増 美 岐 卓

戦国に三人子亡くしし蘭丸の母の菩提寺水木を抱けり

歩度ゆるめ蘭丸産湯の井戸を過ぐ石垣のみが残る城跡
城跡に借り着のごとく咲く桜戦国の遺構おひつくせり
去年ありし水榭林は消え去りて物流拠点となりはててをり
守らねば失ふものの多き春平和電力・みづなら林

水上 比呂美選

きつと泣く 高 橋 みどり* 愛 知

卒業を見届けられぬ生徒らと過ごす一年 今朝始まりぬ

最後だと知っているから特別になる大掃除、避難訓練

一年のうちにわたしも離任者としてそこに立ち、泣ききつと泣く
父さんはどうしているのとわたしには決して問わぬ娘がひとり
言わなくていい一言を言いましたキャリーバッグで轢く落ち椿
週末は運行しない鈍行の列車のごとき普通郵便

花嫁 御寮 樋田 由美*三重

雛の日に三回目なる接種して頭の中の鹿威し鳴る

春光に昔のごとき騒めきを知らず知らずに探して歩く
曇天に桜の霞む街なかをサイレン鳴らしパトカーが行く
躑躅咲き桜舞い散るそのなかを花嫁御寮は朗らかに行く
望んでも許されないと分かる時人は瞳に海を湛える

ハグするふたり 橋本 武則*大阪

就床の前にハグするわがふたり老いて笑顔で背をさすり合う
子ら離れ後も母さん父さんと呼び合うふたり昭和の夫婦
二上山「可愛い山よ」という妻は双つの峯を双児とみるらし
燦々と差す光芒に包まれて落花のもとにわれ佇ち尺くす
街中は川の面光る夜明けにて山際すでに春の曙

風が駆けてく 森本 順子*兵庫

病室の淡いカーテン一枚の空間に居り検査待つ我
カーテンの隣りは知らぬ人ばかり菓子食べる音いびきかく音
たんぽぽとすみれと土筆の野の径を子らが駆けてく風が駆けてく
たんぽぽは土手の傾りや畦道のあちこちちよんこんと根を張って咲く
手の平をじつと見つめた若いころ今は手の甲の血管を見る

魚の名など 籠田 くみよ 和歌山

降りそそぐ月の光の清けくもこよひ誰が死ぬ消炭の空
待合に名を呼ばれば顔をあげ吹つきるやうに行く医師のもと
可笑しくも寂しくもあり動画には息子の鬼役幼子の声
穏やかに春日たゆたふ日高川魚の名など語る橋の上
ぶらんこのよじれ解ける夕暮にロシアを語る人の手白し

十三夜の月 福庭 加恵子 広島

気水域に群れて浮かびし水鳥はシベリアに帰りしか水面平ら
夜嵐の吹き荒れし朝 西空に十三夜の月白く残れり
独りなる生活に馴れる事はなく辛い哀しい寂しい日の暮れ
燃ゆるごと海の彼方を染めてをり水平線に落つる夕陽よ
防潮堤に居並ぶ釣人帰り行き夕べの浜に潮の音高し

原賀 瓊子選

福祉 弁当 宮地 正志 香川

届きたる福祉弁当当縁で食べ花見しながら春を楽しむ
わが植ゑし染井吉野は五十歳老いにまばゆき満開となり
山峡に街灯の如桜咲く明かりともりし限界集落
猪に荒らされ傷む休耕田稲作せずとも補修に励む
街灯の消ゆる時刻が少しづつ早まりゆきて季節が移る

紫雲 出山 山下 啓子*香川

リモートで役員会議をしています六分割の画面の中で

イカナゴのそれより小さい茹でたての「新子」いたたく瀬戸内の春雨あがり長靴の跡二つありじいじの畑に春休み来たしうでやま紫雲出山被う桜の木のかなかに病氣療養の黒い幹あり花びらの絨緞に付くタイヤ跡隠す花びら木にはもう無い

半年 単位 重 永 栄 子 福岡

好みぬしくイズ近頃みな玄人 巨人・広島戦観るこちらには解る年寄り皺もろに出てゐる集合写真なまじマスクを外せしばかりに過疎の町近ごろ鴉も慣れて来て友好的な声で呼ぶなり八十六歳ゴツチンゴツチン歩みゆく半年単位と思ふ生きざま蜜蜂が花より出でて水運ぶ齒科のコップのイラスト嬉し

リハビリー靴 酒 井 恵 子*長崎

桜花朝な夕なに眺めおりあした晴れたら満開ならん母履きしリハビリー靴が役に立つ吾の入院に四度使いぬ長崎に新幹線の来るとげな待ち遠しかね秋のくるとが



水上 美季選 「その二集」特選

突 如 満 開 山 崎 俊 一*茨城

空風に田中歩みて身を晒し昨夜の口舌は乾きゆきたり
催花雨に一夜打たれて白モクレン黄ばめる姿朝陽にさらす

ガス代の子想を越ゆる通知書が寒かりし冬を想い起こさず
吾子眠る寺の桜は葉桜に、八重の桜はぼつてりと咲く

防 護 服 新 屋 希 子 熊 本

面会のかなはぬ父にいろはすとビスコを一箱病棟にあづく
「外はねえ、さくらの花が満開よ」意識の濁る父に語りき
吾の声にまぶたを動かす父がゐた 菜の花色の吾の防護服
モニターの心電図の波静まりて父看取りたり春の夜の闇
老父に四足歩行をすすめし日 戯言いへる幸せありき

ま す ら お 永 松 たづ子*大分

弥生朝、古紙出すかたえ一束の「ニュークラウン」など教科書のあり
「才能」の語義はすなわち「不公平」ピアス抜く指今宵つめたし
兵たるとキールウにとどまる丈夫はふところ深く妻子をだきしむ
ゲルギエフ指揮するシヨスタコービッチCD五枚封印をしつ
啓蟄のレンガの下のだんご虫一つ逃げだし一つまるまる



「桜切るバカ梅切らぬバカ」というも桜に毛虫梅にうぐいす
催花雨に冷えにし一夜明けたれば桜並木は突如満開

はぐれしか一人泣きなきさ迷えるキエフの幼児に雪ちらつきぬ

正 気 に 戻 る 浅 見 康 子 千 葉

和太鼓の森のステージ上空に響き届くか鳥渡り行く

花のみの桜は妖しあをあと葉の交じり初め正気に戻る
嬉しげな囀り繁し満開の桜にひよどり見え隠れして

ひとひらづつ枝より降れる花の雨静かな風に吹雪とならず
駅ナカの珈琲の香が漂ふ階一台見送りゆつくり下りる

歪なへそ 人見江 一 * 神奈川

遅くまでミシン踏む音母の音子は聞いていた布団の中で
花束を手にして帰る春の暮れ勤めの日々を終止符を打つ
「わけあり」と記されているデコポンの歪なへそが僕を見つめる
自転車に初めて乗れた瞬間に思わず僕は羽ばたいていた
父連れて整形外科に行く前に車椅子でのルート確認す

高円寺 岩館澄江 * 東京

モモンガはバツとひらいて飛んだ後びろびろの腹を持て余して
ふくよかなひよこを食べるアイデアのまんじゅうがこの日本にはある
ほとんどが水でできてる身ひとつをもつてわたしは光をかえす
住んでいたときは彼氏のようにだった高円寺がもう他人のそぶり
居酒屋でパーティーションを取り払う君にまんざらでもない私
カレーとはどのスパイスを抜いたときついにカレーでなくなるのだろう

ミルクが舌に 宮 太一郎 * 東京

土冷える雨晴れの朝あおとおと黄砂少なくて空澄みわたる
ベッドにて運ばれる人見送つて帰りを待った日から一年
ドトールで気がつけばもう1時間ミルクが舌に居残っている
春の雪が降るかもしれぬカフェのなか約束みたいにジャズが流れる
朝夕のラッシュアワーは密となり入線を待つ通勤電車

富士りか選

兄の手紙 小森鈴子 岐阜

出できたる馬鈴薯の葉はしわしわで赤子のやうな弱きすがた
バナ指の手術受けたたり白帽子きりりと付けたるなじみの医師に
目も耳も弱りきしゆゑ店閉づと兄の手紙に書かれてをりぬ
店しまひセルの兄のプティックを夫と訪ひたり採りし葉もちて
春の土を踏みつぶしつゝ進みゆく(へ)をつけたる戦車の列が

花びら走る 森崎洋子 * 静岡

畑白き大寒の朝鳩群れて揃いのダウン着て丸まれり
山野辺をうす紅色に染めあげて吹雪のごとく花びら走る
新緑を映して蒼くひかりおり背伸びして立つブロウズの裸婦
獲物狙うカメレオンの舌さながらに胡瓜のつる先まるまっております
風にのりハスの露玉コロコロと空を丸めて右へ左へ

並縫い 小田沙也加 * 愛知

春キャベツを煮込んだときの緑色が入った色鉛筆が欲しい
焼き芋の行列を目でなぞつたら標本調査が上手くてきそう
弟の革靴にまだ皺は無く花弁を踏んだ跡だけがある

未練という言葉を口に出すことの甘さ軽さよ並縫いに似て
ニュートンの林檎の木には花が咲き星よりヒトを引きつけている

花影 福本郁子 * 京都

花びらを乗せたアメンボよぎり行くこの水の辺にまた春の来て

白蓮の蕾ようやくふくらみて春の夕べは青みを帯びる

掌の中におさまりそうな小さき鳥鳴き声高く花影にあそぶ
ふくみても触れても優し春の水ひとに会わない暮らしの中で
雪柳はこごめざくらと言うような散りゆくものの名の美しさ

ぐいぐいと

大池 アザミ*兵庫

ぐいぐいとリードひっぱるシバイヌよ目的地なぞ知らないくせに
「神様」とつぶやいてみる祈ること何にも思いつかないけれど
置きざりの傘をひらけばばりばりと目覚めの音の後に崩壊
筋肉の隆起のような山々へ電信柱のアーチをくぐり
靴下を脱げば解放された五指ぱつとひらいて息をするよう

影山 一男選

春の色

土山 純子*兵庫

手の中の幸せコロコロ転がりてこぼさぬように懐に抱く
一年は巡り巡りて桜木のつぼみに春の色を塗りゆく
コロナ禍の今年も桜は淋しげに風に吹かれて我を招きぬ
ペランダで鶯の声遠く聞き戦場の空の澄むを祈りぬ

真実と事実のちがいはあるを知るロシアの主張と戦禍の街々

新牛舎

新敦子鳥取

糞尿の臭気に眉をひそめられ牛飼ひの父孤立をしたり
牛飼ひをなりはひとせし父母に牛飼ふほかの道はあらく

先頭の二頭の牛に連なりて若き牛らが入る新牛舎

嫁ぐわれの幸せ願ひつづられし母の日記を読みつぐ深夜
雨の夜はしきりに母が思はれて残り香うせしパジャマをはおる

啄木 忌

細木 圭子 高知

侵略を画面にみたるその手口北方四島かくのごとしか

ポツダムに二度訪ひて吾の知りし北方領土の矛盾と無念
離農者のふえたる峡に春の風田を畑にかへううる生姜よ
「新高」の数多ある樹を伐りぬたる男短く「梨をやめる」と
とほき日の習ひし声にかへらねど「初恋」歌ふ啄木忌けふ

花かんざし

尾花 照子*福岡

夕暮れの花の小道を過ぎゆきぬジェイブルーのギターケースは
『如懿伝』の熾妃の花かんざしの上に「ロシア軍事侵攻」とあり
半熟であれば流れて完熟であれば割れたり人と国家は
妻と子は私がつくった骨つぽで眠っていますと井上萬二氏
憶年の海よりきたる金鱗に人はつどいて歌と名づける

ロゼが綺麗だ

福田 春子 福岡

入社証さし出す青年サクラサク卒業証書は見せずとも良し
おほははのバースデイケーキに挿す火花ばちばちつと一瞬に消ゆ
生れ日をひとり祝ぐ宵甲州に醸ししワインのロゼが綺麗だ
睡眠時無呼吸吸す画面といふわが魂は何処に遊ぶ
野菜庫に冬を越したるさつまいも豚汁の具にふはり浮きをり